

ガラテヤ人への手紙1章6-7節 「福音からの離反」

1A 召される神

1B 神の主権の選び

2B キリストの恵み

2A 急に離れる衝撃

1B 逆戻り

2B ほかの福音

3A 別にない福音

1B 動揺される者たち

2B 中身の変質

本文

ガラテヤ人への手紙 1 章を開いてください。私たちは新しい手紙に入りますね、午後に一節ずつ 1 章を見ていきたいですが、午前は、手紙の本論となっている箇所、1 章 6-7 節に注目したいと思います。「⁶ 私は驚いています。あなたがたが、キリストの恵みによって自分たちを召してくださった方から、このように急に離れて、ほかの福音に移って行くことに。⁷ ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたを動揺させて、キリストの福音を変えてしまおうとする者たちがいるだけです。」

コリント人への手紙で私たちが知ったのは、パウロが福音を伝え、教会が建て上げられていった後で、偽使徒たち、偽教師たちがやって来て、人々の信じていることをかき乱していたということです。コリント第二 11 章には、「別のイエスを宣べ伝えている」「受け入れたことのない異なる福音を受けたりしている」と、パウロは言っています(11:4)。パウロが福音を宣べ伝えた後で、エルサレムやユダヤから、これらの自称、教師たちがやって来ます。教会は、まだ信じていない人々に福音を宣べ伝えますね。ところが、これらの偽教師たちは、すでに信じている者たちを相手にして、パウロの宣べ伝えている福音では足りない。これこれ、こういうことなのだといって、それ以上のものなのだといって、人々の信仰に混乱を与えます。そして、自分たちが信じていることの内容を、その性質から変えようとしているのです。ですから、パウロは、「あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。」と言いました(Ⅱコリ 13:51)。信じている内容を、根こそぎ変えてしまうという、恐ろしさです。

この恐ろしいことが、コリントの教会以上に、全体的に広がっていたのが、ガラテヤ地方にある諸教会です。使徒の働きでは、ピシディアのアンティオキア、イコニオン、リステラ、デルベ辺りが、ガラテヤ地方の中にあります。そこで、大勢の人々が信じて、ユダヤ人ではない異邦人も信じて行っ

たことを思い出してください。ところが、こういったところに、エルサレムやユダヤからやって来た者たちがいました。パウロの伝えている道は、それだけでは足りない。イエス・キリストを信じるだけでは足りないのだ。イエスは、ユダヤ人のメシアであり、ユダヤ人であるからこそ救いを得るのだ。だから、ユダヤ教に改宗しないとイケない。割礼を受けて、モーセの律法を守らないとイケない、と教えたのです。それで、彼らは割礼を受け、安息日、祭りなど、いろいろな日を守り始めました。ユダヤ人が行っているいろいろな儀式を守り始めたのです。

これらの儀式自体に問題ありません。律法に書かれていることを行うこと自体は問題ではないのです。そうではなく、イエスを信じるだけでは不十分なのだ、とするところが問題です。これらのことを守り行うことで、神の国に入ることができるのだ、とするところに大きな過ちがありました。つまり、神の恵みによる、信仰による救いではなく、キリストだけでなく、律法の行いも救いの完成のために必要なのだとしたのです。イエスを否定していませんが、イエスに付け加えたのです。しかし、実際は、付け加える時点でイエス様を否定しています。イエス様にあって、救いは完成しているからです。この方で完全な者にされているのです。キリストが十字架で死なれて、すべての負債を支払ってくださったからです。ですから、それに付け加えることは、その完全なわざを否定することであり、キリストご自身のわざを否定することになります。恵みが、恵みでなくなります。ガラテヤ書で、いかにこれが誤りであり、致命的であり、救いから外れる教えであるかを学んでいきます。

今朝のみことばは、パウロは、「私は驚いています。」という言葉から始めている驚きを感じることはないかと思います。彼らが、あまりにも急に恵みの福音から離れてしまいました。みなさんの周りでも、あまりにも急に変わってしまう人がいるのを見て、驚いたことはありますか？ある人が、特に、今まで豊かに恵まれているような人が、そこから急に離れてしまう時の衝撃です。人の心というのはこうも脆いというか、移り変わるものです。パウロは、それをガラテヤ人の中で経験しました。けれども実は、このことは今に始まったことではなく、聖書の中で、幾度となく起こってきたことです。後で、その例を見ていきたいと思います。

1A 召される神

1B 神の主権の選び

まず、私たちキリスト者がどれほど恵まれているかをみます。「あなたがたが、キリストの恵みによって自分たちを召してくださった方」と言っています。すべては、神から始まっています。「1コリ1:9 神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。」神が召されて、それで交わりの中に入れられました。

私たちは、自分がこの道を選んで、それでキリスト者になったと思っているかもしれませんが、もちろん、主に従うという決断をして、今の自分がいます。けれども、この信仰の世界というのは、すべてが神から始まり、神によって成り立ち、神に至るといふ、神の世界、神の国であります。救いにつ

いて神のご計画があつて、なんと世界の基が置かれる前から、キリストにあつて私たちは選ばれていたのです。そして、時が来て神が私たちを召してくださいました。パウロ自身、自分がユダヤ教に熱心で、教会を激しく迫害したほどだったのに、「しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださいました神」と、1章 15 節で言っています。母の胎にある時から、彼が何かを行なったから選び出されたのではないことが分かりますね。彼が偉大な働きをしたから選ばれたのではなく、神が初めから憐れんで選ばれたから、大きな働きをしたのです。

このように神の選びは、神の憐れみに基づくものです。私たちが、何かをしたから選ぶのではなく、むしろ選びたくない要素がたくさんあるのに、それでも選ぶのです。それは神のご性質が、憐れみ深く、恵みに富んでいるからです。「申 7:7-8 【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。8 しかし、【主】があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、【主】は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖い出されたのである。」神は、このように永遠の愛で私たちを憐れみ、そしてキリストにあつて選び、そして召してくださいましたのです。

2B キリストの恵み

そして、「**キリストの恵みによって**」召してくださいました、と言っています。キリストが、私たちの罪のために十字架に付けられて死なれました。そして葬られ、三日目によみがえられました。これがキリストの恵みです。私たちの罪が赦されて、清められ、新たないのちを得るのに、私たちのほうで何もしていません。キリストが行われたことを信仰によって自分のものとすることによって、それが自分の内に実現しました。

パウロは、自分がどのようにして使徒となつたのか、信仰の子であるテモテに対して、このように述懐しています。「I テモ 1:12 私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださいましたからです。」パウロは、キリストが自分を忠実な者と認めてくださった、と言っています。ここでとっても大事なものは、彼が何か偉業を成し遂げて、最後までイエス様に忠実だったから、忠実な者と認めてくださった、と言っていないことです。その反対です。彼が何もしていない時に、すでに忠実な者と認めてくださったのです。そしてこれは、圧倒的な神の憐れみと恵みによってなのです。

続けて読みます。「1:13-15 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。14 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」パウロが、忠実な者と認められ、彼が任命を受けたのは、実に、

彼が神を冒瀆し、迫害し、暴力をふるっていた時なのです。彼がダマスコに行く途上で、ダマスコでキリストの弟子たちを捕縛しようとしていた時です。復活の主は、そこでパウロをたちまち滅ぼしても良かったのです。しかし、イエス様は、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか？」と問いかけられ、直ちに、福音宣教者として召されました！そんなこと、あるでしょうか？神は、大いなる憐れみを示されました。彼の罪を赦し、赦しただけでなく、福音の働きに召されたのです。この恵みに圧倒されて、パウロは、自分のことを「罪人のかしらです」と呼んでいます。

だから、キリストの恵みよる神の召しとは何か？それは、「神が、キリストにあって、初めから完全な者として召される。」ということなのです。「コロ 2:10 あなたがたは、キリストにあって満たされているのです。」ここの「満たされている」は、完全になっているとも訳せます。完全であるかた、義なる方の内にいるのですから、そうなのです。そして、私たちが召されている時点で、神は、キリストの似姿、栄光の姿に変えられたとまで言っています。「ロマ 8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」栄光に変えられるのは、イエス様が戻って来られてからなのですが、けれども、すでに神は、栄光を与えるとお決めなっていて、そう定めてから召しておられるのです。

ですから、私たちが今、とりあえず救われて、そして救いにふさわしい人間になるように、修行を積むということではありません！キリストにあってすでに完全な者なのです！大事なものは、この恵みを心で信じて、受け入れます。この大いなる恵み、豊かな恵みにあずかります。そうして信じている中で、自分は神の作品として、その用意された良い行いをしていくようになります。「エペ 2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」パウロは、初めから忠実な者と認められました。その大いなる恵みによって、パウロは、他の使徒たちよりも多くの働きをしました(I コリ 15:10)。私たちは、ただ神を信じ、キリストに従う生活を送るのです。そうすれば、御霊によって、神の作品となっていきます。神ご自身が良い行いも用意しておられるのです。

2A 急に離れる衝撃

けれども、キリストの恵みによって、召されているのに「**このように急に離れ**」ていると、パウロは指摘します。逆戻りするということがあるのです。

1B 逆戻り

イスラエルの民のことを思い出しましょう。彼らは、シナイの山のふもとで、モーセを介して神との契約を結びました。そして、主の言われたことは聞き従うとも宣言しました。それから、モーセはシナイ山に上り、四十日四十夜、主から命令を受け取っていました。そして降りて行こうとした時には、十戒の始まりにあり、「偶像を自分のために造ってはならない」の戒めを破る、金の子牛事件があ

りました。こんなにも急に、主の命令から離れてしまったのです。そして、荒野の旅を経て、ヨシヤ率いるイスラエル軍が約束の地に入りました。ところが、士師記を見ますと、時間が経っていないのに、たちまち、周囲の住民の神々に仕え始めるのです。私たちが先ほど読んだ、詩篇の箇所、106 篇にはそのことが書いてあります。

このように、いとも逆戻りするということが十分にあります。ガラテヤの人々は、異邦人でありながら、ユダヤ人が守っている習慣に従いました。これらは、ユダヤ教の中にあるもの、律法の中にあるものですが、以前の信じる前の風習にも、同じように「掟にがんじがらめになっていた」ということでは同じなのです。「4:8-9 あなたがたは、かつて神を知らなかったとき、本来神ではない神々の奴隷でした。9 しかし、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして弱くて貧弱な、もろもろの霊に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。」ユダヤ主義者から教えられた時は、福音よりも新しいもの、めずらしいものを取り入れた気分だったでしょう。しかし、実は、従来、救われる前の論理で動いていて、逆戻りしているのです。

キリスト教ではありませんが、新興宗教において同じものがかつて見ました。私が大学生の時、日本経済がバブル期にありました。物質主義が横行していて、若い人々の中に、物質的なものだけで生きていく価値観に幻滅していた人たちが多かったのではないかと思います。そんな中で流行っていたのが、オウム真理教です。物質だけではなく、精神世界、霊の世界を求めたのです。しかし、オウム真理教が地下鉄サリン事件を起こしてから、だんだん明らかにされてきた内部事情があります。結局、道場において超自然的なことを求めながら、中身は、企業の論理なのです。ノルマが課せられ、競争のような状態に逆戻りしていたのです。キリスト教でも同じことが起こりえます。恵みの福音によって解放されたのに、福音だけでは不足を感じて、それ以上のことをしようとしたら、昔の規則にがんじがらめになっていた、ということが十分あり得るということです。

2B ほかの福音

そして、「**ほかの福音に移って行くことに**」と言っています。ここの「**ほか**」は、ヘテロスというギリシア語で、「別の種類の」という意味合いがあります。質が変わっている、別種のものということです。恵みの福音ではない、全く別物ということです。言葉は、同じ「福音」を使っているのですが、実は中身が変わっています。イザヤも預言の中で、口では言っているが、心が遠くに離れていることを語りました。「イザ 29:13 主は言われた。「それは、この民が口先でわたしに近づき、唇でわたしを敬いながら、その心がわたしから遠く離れているからだ。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれたのでである。」人間の命令を教え込まれているから、口先では敬っているのです。けれども、心が遠くから離れています。

3A 別のない福音

そこで、7 節でパウロがこう言っています。「**ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわ**

けではありません。」イエスだけでは足りない。あなたがたがユダヤ教徒になって初めて、救われるのだということが、果たして福音なのか？良い知らせなのでしょう？いいえ、パウロは、敢えてギリシア語で「ヘテロス」を使い、異質なものであることを強調し、今度は、「もう一つ別」という言葉には「アロス」という、同じ質を表すギリシア語を使っています。同じ種類の福音ではないのです。

1B 動揺される者たち

「あなたがたを動揺させて」と言っています。教会の指導者たちがエルサレムに集まって、会議を開いたことが、使徒の働き 15 章に書いてあります。そこで、ユダヤ人の信者から尊敬されているヤコブが立ち上がって、神が異邦人をも立ち上がらせることを預言から引き合いに出し、次のように言いました。「15:19 ですから、私の判断では、異邦人の間で神に立ち返る者たちを悩ませてはいけません。」異邦人がユダヤ人のようにならなければいけないと聞いて、心を悩ませたのです。そして、決議にはこう書いてあります。「15:24 私たちは何も指示していないのに、私たちの中のある者たちが出て行って、いろいろなことを言ってあなたがたを混乱させ、あなたがたの心を動揺させたと聞きました。」エルサレムの教会から出た者たちでした。けれども、指導者たちからの指示は何も受けていません。そして異邦人の兄弟たちを混乱させ、心を動揺させました。

神の恵みは、人を必ず平安に導きます。パウロの手紙の挨拶は、いつも、これですね。「1:3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。」恵みは、自分がどうであるかに関わらずに、神のご性質によって与えられているものだからです。神が真実な方であり、神がご自分のことを、信じる者たちを通して行われるのです。だから、安定しています。しかし、彼らはユダヤ主義者らの教えを聞き入れて、心に平安がなくなりました。それもそのはず、神の備えられたものではなく、自分の肉の努力にかかっているからです。心がいつも動揺していません。調子よいと思ったら高慢になり、調子が悪ければ落ち込みます。そして、いつも、自分は罰せられるのではないかという恐れがあります。そしてうまく行っているように見える時でも、全き平安はなく、どこかで縛られています。それは、人々を恐怖に陥れる奴隷の霊だからです。

2B 中身の變質

そして、「キリストの福音を変えてしまおうとする者たちがいるだけです。」と言っています。恐ろしいことですね、自分は福音を信じて、受け入れていると思ったら、全く別物になっていたのです。ちょうどそれは、病院で点滴を受けている患者さんが、入れられている液体が別物に変えられていたようなものです。点滴を受けている姿は全く同じですが、中身が変わられているのです。

キリスト者にとって大きな誘惑は、「あなたは、イエス様だけでいいんですか？」という誘いです。イエス様だけ、というのが、あまりにも単純です。そして、へりくだりが必要です。自分の頑張りや、これまでの努力や功績は、一切認められないからです。イエス様だけというのは、自分がどれだけ魅力的かということとは言えなくさせます。だって、受けるに値しないものを受けているのですから。

少しだけでも、そこに自分の頑張りを肉の誇りを入れたいという誘惑が来るのです。

また、サタンは、「あなたは、イエス様だけと言っているけれども、きちんとできていないね。」と誘い込みます。きちんとできていないからこそ、イエス様だけに立つのです。恵みによって強められます。けれども、サタンは、今の私たちの姿を見させて、「あなたは、それだけでは、恵みだけでは足りないのだよ。」と誘うのです。それで、「これを行えばあなたがたは、素晴らしいクリスチャンになれます。十分に救われた？人になれますよ、と誘うのです。

それはまるで、イエス様が造られた絶妙な料理、これ以上良くなならない完璧な料理に、自分の勝手に考え出した調味料を入れるようなものです。ちょっと足せばよいのだろうと考えますが、その自分の臭さ、醜さが料理の全体を台無しにします。恵みは、徹頭徹尾、神のなさることです。神から始まり、神によって動き、神に至るのです。そこに、人間のわざが差し挟まることはないのです。けれども、人は肉を誇りたい。その誘惑に負ける時に、「急に離れ」ということをしてしまいます。

ここで大事なのは、「留まる」ということです。初めて異邦人に福音が広がって行ったアンティオキアの町に、エルサレムからバルナバが遣わされました。「使徒 11:23a バルナバはそこに到着し、神の恵みを見て喜んだ。」とあります。そして、「11:23b 心を堅く保っていつも主にとどまっているように、皆を励ました。」とあります。恵みによって救われただけでなく、恵みの中に生き、恵みに拠り頼むのです。主に留まるのです。

「急に離れて」

金の子牛事件、荒野の旅(詩篇 106:13)、士師の時代(2:17)

「ほかの福音」

イザヤ 29:13 口では敬っているが、心が遠く離れている

A further reason for Paul's astonishment is that the Galatian Christians were "deserting the one who called [them] by the grace of Christ" (μετατίθεσθε ἀπὸ τοῦ καλέσαντος ὑμᾶς ἐν χάριτι Χριστοῦ). The middle form of μετατίθημι has the special sense of "change over," "turn away from," "fall away," "desert," and "become apostate," being used in this manner in secular Greek¹

「キリストの恵みによって」

Paul's characterization of his message as τὸ εὐαγγέλιον τοῦ Χριστοῦ ("the gospel of Christ") appears a number of times elsewhere in his letters as well (cf. Rom 15:19; 1 Cor 9:12; 2 Cor 2:12; 4:4; 9:13; 10:14; Phil 1:27; 1 Thess 3:2; see also 2 Thess 1:8),²

1テモテ1章 自分を忠実な者と認めてくださった方

全く忠実ではない、神に反抗し、罪を犯していた者を、あたかも忠実であるかようにみなされた。

神の方法は、「初めに完全を与える。それを私が信じ、受け入れて、それが実現していく。」

ロマ8章 召されて、キリストの似姿に定められている

エペソ2章 神の作品であり、良い行いが備えられている

一心に、この方を信じて、生きていく。

「召す神」

But Paul's reference elsewhere in Galatians to God as the one who calls (cf. 1:15, "the one who called me by his grace"; 5:8, "the one who calls you") and his continuance of this practice in his other letters (cf. Rom 4:17; 8:30; 9:12, 24; 11:29; 1 Cor 1:9, 26; 7:15, 17–24; Eph 1:18; Phil 3:14; 1 Thess 2:12; 4:7; 5:24; 2 Thess 1:11; 2:14; 2 Tim 1:9)³

Paul is astonished that his converts in their pious attempt to be rigorously scrupulous are actually turning away from God, "the one who called you by the grace of Christ." This was a shocking state of affairs. For by their turning away from "the truth of the

¹ Longenecker, R. N. (1990). [Galatians](#) (Vol. 41, p. 14). Word, Incorporated.

² Longenecker, R. N. (1990). [Galatians](#) (Vol. 41, p. 16). Word, Incorporated.

³ Longenecker, R. N. (1990). [Galatians](#) (Vol. 41, p. 15). Word, Incorporated.

gospel” (2:5, 14), Paul’s converts were in actuality recapitulating the scenarios of Israel’s apostasies and rebuffing the very One whom they professed to be attempting to worship more adequately.⁴

「動揺させて」

The verb *ταράσσω* (“disturb,” “unsettle,” “confuse”) was used in the Greco-Roman world of political agitators who caused confusion and turmoil, but appears in the NT in a figurative sense to describe mental and spiritual agitation. It is the word used to describe the Judaizers and their work again in 5:10 and 6:17 (cf. Acts 15:24), and may very well be an allusion to Achar “the troubler of Israel” (cf. 1 Chr 2:7).⁵

「変えてしまおうとする」

ほか(ヘテロス)の福音、もう一つ別(アロス)

⁴ Longenecker, R. N. (1990). *Galatians* (Vol. 41, p. 15). Word, Incorporated.

⁵ Longenecker, R. N. (1990). *Galatians* (Vol. 41, p. 16). Word, Incorporated.